# 私が政治を変える！

## 総選挙に挑んだ若手候補者たち（上）

**自民党の大勝という結果になった先月の衆議院選挙。今回の特徴の一つは、党によって程度に差はあるものの、若い候補者が非常に多かったことだ。実際に選挙に出馬した、今後の政治を担うことになる世代の方々に、立候補の動機や政治にかける熱い思いを聞いた。**

――まずは今回の総選挙に出ようと思われた動機、きっかけから。

**伊藤（公明党）** 私の場合、党の方からお話をいただきました。いま、二世議員の方や議員秘書から政治家になる方が非常に多いからこそ、大学院を出て一一年間、ＪＲ東海に勤めていた私のような会社員、一般社会で実務に携わってきた人を候補者として擁立したい――という話だったんです。

ただ、片やものすごく安定したＪＲから、ものすごくリスキーなこの世界に移るものですから、なかなかそこを決断してくれる人間がいない。だからよく考えてもらいたいと。もちろん党として全面的に応援するということでした。

政治家になろうなんて、いままでの人生で考えたことなかった。でも、自分が役に立てるのであれば、やれるだけのことはやってみたいなと、率直に思いました。

それにまだ年齢的にも安全なほうを選ぶ年齢でもない。これからいくらでも人生を切り拓いていけるだろうという思いもありました。

**小島（社民党）** 私の場合、選挙に出るのは二回目でした。最初は二年前の衆議院選挙のとき、党から話がありました。当時、経営していた塾を辞めて、実家のある福岡で就職していたんです。そしたら山口の県連から、「選挙になりそうなので、候補を立てて戦いたい。会社をすまんけどやめて出てくれ」と言われて……。無茶言うなぁと思ったんですけど、やっぱり「憲法があぶないんだ」と口説かれると、憲法を護るために社民党に入って自分の損得抜きでやってきた私としては、「じゃ会社もやめよう」と。親にも相談せずにかなり怒られましたけど、出馬しました。

そのときは落選して、福岡に帰って会社に勤めていたのですが、「もう一回挑戦したい」という思いがあって。次は一年半ぐらいかけてじっくり準備すればと思っていたんですけれども、急に小泉さんが解散したものですから、今回

も一カ月ぐらいしか準備期間がなくて……すごくきびしかったですね。

――小島さんぐらいの歳の方は、まず地方議員になって、ステップアップして国会議員になるというケースの方も多いですが。

**小島**　もちろん、そういう意見もたくさんありました。ですが、憲法の問題で闘っていくことを考えると、自治体議員として声をあげていくことも大事なんだけれども、党が国政で一定程度の議席を得ないことには展望が開けないと考えました。

――岡田さんの場合は、秘書としてある意味、すでに政治の世界に入っていらっしゃった。

**岡田（自民党）**　これは自民党の傾向なのかもしれませんが、サラリーマンや主婦からというより、議員秘書から議員へというケースが多いですね。私もその口で、小さいころから政治家になりたかった。だから議員秘書の道に入って、いずれチャンスがないかと思っていました。名古屋出身ですから、できれば選挙区は名古屋がいい、ということです。

名古屋は民主党が大変強いんです。河村たかしさんや古川元久さんなど有名な方がおられて、ずっと自民の現職がいない状況です。今回、安倍晋三幹事長代理が、そういう現職のいない選挙区は全部公募で選ぶという方針を出したんです。名古屋で議席を奪還するためには、旧来型の考え方じゃなく、若い人を出さなければということで選んでいただいたわけです。決まったのは六月末、刺客云々の時期より少し前です。

――待ちに待った総選挙が、早めにきて嬉しかったという感じですか。

**岡田**　選挙戦の最中は、「小泉ブーム」を感じましたけれども、いかんせん、少ない準備期間で。基本的な準備もできないまま勝負になっちゃったのは、多少悔いが残っていますけれども。

公明 35歳

## 伊藤 渉

いとう　わたる・一九六九年、愛知県生まれ。大学院卒業後、JR東海に一一年勤務し、退職。東海ブロックの比例区から立候補、当選。

**政治家になろうなんて、これまでの人生でいちども考えたことがなかった**（伊藤）

――日本共産党の場合には、太田さんが出られた東京七区に限らず、まず選挙区では議席は取れないだろうというきびしい状況でした。結果がほぼ見えているなかで、候補者になることを引き受けられた動機は。

**太田（共産党）**　やはり、憲法改悪の動きが非常に危険だという思いがまず一つ。

それから、私の周りには、真面目に生きたいと思っている若者がたくさんいるんですね。人の役に立ちたいと思って福祉の現場に行った。ところが現実は非常にきびしくて、補助金も出ない。利用者にはどんどん負担をかぶせる。自分自身も体をこわしてやめざるを得なくなる。そういう話が山のようにあるわけです。多少は個人個人のツキもあるでしょう。だけど大元にあるのは社会の問題で、そこは正していかないとまずいなというのはありました。

ただ、言い訳がましいんですが、僕も、実は政治家になろうと思っていたわけじゃないんですよ。だから、話がきたときは、正直びっくりしました。ずいぶん悩みました。

――いつごろ話があって、いつごろ決心したんですか。

**太田**　八月八日が解散でしたけど、三日に決心しました。話が来たのはその二週間ぐらい前。でも悩んだお陰で、なぜやらなければいけないのかという点を自分の中で整理できた。選挙には非常にすっきりした形で臨むことができました。

――大石さんは二回目の選挙ですね。

**大石（民主党）**　前回は私も一カ月半ぐらいしか準備期間がなくて、本当に右も左もわからない状態で、選挙を周りの皆さんにやっていただくような形の選挙でして。今回は、たとえばどなたかが出陣式なり演説会なりに来てくれて、どこに住んでいて等々、支援してくださる皆さんのことを把握できた状態で選挙させていただいたので、「自分の戦っているもの」が冷静

社民 34歳

## 小島 潤一郎

こじま　じゅんいちろう・一九七一年福岡県生まれ。大学院卒業後、塾経営、渕上貞雄・参議院議員の第一秘書などを経て、〇三年の衆院選に山口四区から出馬、落選。今回の選挙では福岡一〇区から出馬、落選。

**少数政党の声を「どうマスコミに取り上げてもらうか」を考え続けた選挙戦でした**（小島）

に見えた選挙ではありましたね。

――選挙を戦ってみて、どういう印象を受けられましたか。有権者の反応も含めて。

**伊藤**　公明党という党のいまの姿や、いままでやってきたことを評価していただく部分はもちろんですけど、皆さんの前に見せている自分の姿そのままで、どう評価していただけるのか。包み隠さず、自分らしさをそのまま表に出して、それが問われるのが選挙なんだなと実感しました。初めて味わう感覚だったことは間違いないです。

**小島**　少数政党に属している者として、「どうマスコミに取り上げてもらうか」を考え続けた選挙戦だったですね。私の選挙区でいうと、当選された自民党の女性の方の出馬が八月の盆に決まったんです。「みかん箱の人」ということで一気に注目されて、知名度もワーッと上がって。それに対して私は、マニフェストをつくって、記者の質問を受けたりもしたんですよ。これは紙面に載るかなと思ったら、ぜんぜん載らない。

その点でも、やはり小選挙区制は、少数政党にとって本当にハードルが高いことを感じた。記事の量からして違うんです。テレビにしても、私はいつも写真だけという感じで、大変しんどい選挙戦でした。

**大石**　今回の総選挙に限っていえば、有権者の関心は非常に高かったと思います。たとえば喫茶店で若い主婦が〝小泉劇場〟の話をしたり、郵政民営化にしても、「それは郵便局を民営化して効率よくしてもらって、保育園をもっとつくってもらわないと」とか、話の内容的にはおかしいんだけど（笑）、そういう会話が出るぐらい、関心を惹いた選挙だったと思います。演説していても皆さんが手を振ってくれたり、話を聞いてもらえたりと、前回とはまったく違いました。

**太田**　私も関心は本当に高いなと思いました。高すぎて、その関心が自分個人にきているものだと錯覚したときもあったんですけど（笑）。

一方で、マニフェストを配れる場所がすごく限られているわけですよ、いまの選挙制度は。候補者の前でしか配れないとか、拡声器が一つしか使えないとか。社民党と同様、マスコミになかなか取り上げられないわけです。二行載ったら載っているほうだと言われる（笑）。そのなかで周りに知らせていくには、「知らせないようにしていく選挙」じゃ難しい。拡声器も昔はもっと使ってよかったんです。マニフェストは、それを見て有権者が判断するわけですから、なんで無制限に配っちゃいけないのか。

今回のように、「郵政民営化すれば、外交も全部よくなるんだ」という与党側の話に対して、「そうじゃないんだ」とマスコミが取り上げないときは、候補者自身が声で拡げるしかないんですね。ところがそれができないのでは、そういう意見があることすらわからない。これは民主主義にとって本当にまずいと思います。痛切に矛盾を感じました。

――自民党の場合は大変戦いやすい選挙だったのでは。

**岡田**　今回、選挙に挑戦するのは初めてだったんですけれど、明らかに以前と違うなと思ったのは、自民党にとって珍しく「攻めの選挙」だったことです。いままでは選挙というといつも、「自民党でごめんなさい」と、〝自民党＝悪〟の構図のなかで戦ってきたんですが、今回は初めて、党と小泉総裁を前面に出して戦うことができた。逆に言えば個人が埋没してしまった部分はあったにせよ、やりやすい選挙ではありましたね。

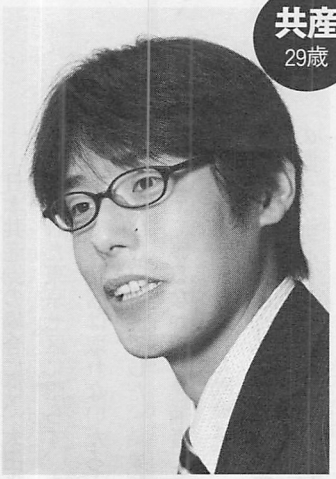
ただ、刺客云々が本当によくマスコミに取り上げられましたけど、「政権交代するか否か」という軸、「護憲か改憲か」という軸、そっちのほうが政治の本来のエッセン

自民 27歳

**岡田 裕二**

おかだ　ゆうじ・一九七八年愛知県生まれ。大学卒業後、森元恒雄・参議院議員の政策秘書に。今回の選挙で愛知二区から出馬、落選。

明らかに以前と違ったのは、自民党にとって珍しく「攻めの選挙」だったことです（岡田）



共産 29歳

**太田 宜興**

おおた　のりおき・一九七六年大阪府生まれ。大学卒業後、印刷会社を経て、共産党の事務所で働く。今回、東京七区から出馬、落選。

マニフェストは、有権者が判断するためのもの。なぜ無制限に配っちゃいけないのか（太田）

スだと思うんですね。そのことよりも、片山さつきさんが土下座したとかしないとか、そっちのほうに有権者の関心が行っちゃったのは、ちょっと残念だったなと思います。

**――自分の所属する政党に対して、「今後ここをこうすればもっと国民にアピールする、あるいは受け入れられる」という提案はありますか。**

**大石**　じゃ、野党第一党から言わせていただきます（笑）。私は今回の選挙は、小泉さんの政治的手法で勝った選挙だと思っています。やっぱり小泉さんはうまかった。それに対して民主党の策略・戦略はまずかった。国民にとってわかりにくいものになってしまった。結局話の論点が郵政○か×かに絞られてしまい、そのまま選挙戦の最後まで乗り切られてしまった。それに対する明確なポジションが民主党は取れなかった。完全な作戦負けです。

やはりこういう時代になったことをもっと認識して、印刷物でもCMでも、国民が何を望んでいて、どういう理解をしているかを見ていかないと。

たとえば民主党のマニフェスト。あれだけ細かいものをきちんとつくっていたって、どれだけの人が読むのか。実際、手に取る方にしたらわかりにくいものになってしまっている。それではまずい。あくまでも選挙は、勝つことが目的ですから。

**――民主党の場合、党のなかで右から左、いっぱいいらっしゃる。憲法に対する考え方も相当違う。今後もそのままでいいと思われますか。**

**大石**　どの政党も右から左まで、いろんなスタンスの方がおられると思うので、民主党だけが右から左というわけではないと思うんです。ただ、問題は、国民の皆さんからそう思われているということ。そこを解消していく努力をしなければいけないと思います。

**――共産党の場合は、選挙の結果を受けて、「主張は間違ってなかった。でも皆さんに理解されなかった」という総括が多い。**

**太田**　理解されなかったというよりも、「届け切れなかった」という総括ですね。演説では言葉づかいがむずかしいんですよ。「むずかしい言葉を使うな、わかりやすくしろ」と僕もずいぶん注意されました。共産党の場合は、そこを大いに工夫しなければと思っています。

それから率直にいうと、マスコミによる「締め出し」があると思うんですよ、少数政党に対して。今回、マスコミにずっと出ていたのは「二大政党」「政権交代」「郵政民営化」、この三つぐらいですよ。で、終わったあとに、「郵政民営化で選挙をやるのは間違いだったんじゃないか」と一斉に言い出す。いまごろ言われても困るなと思うわけですよ。そういう意味ではマスコミの影響は大きいと思います。

**――自民党は選挙技術に長けているという印象を受けますが。**

**岡田**　今回、自民党は勝利しましたが、次には揺り戻しがあるはずなので、「党営の選挙」を考えていかなくちゃいけないんじゃないかと思っています。たとえば民主党は公募に関してはずいぶん早い段階からやっているものですから、公募で選ばれた若者をどうやって党として支えたらいいかというノウハウは、うまくなってきているんですよね。自民党の場合、本当にひとりぼっちで置いてきぼりにされる。

民主党の場合は、候補者に対してちゃんと生活費も出している。なのに自民党の場合は生活費が出ないんです。政治活動費は出るけれど、生活費に関しては自分で工面しなくちゃいけない。かりに選挙まで四年間あったら、四年間自分で生活していく術を研究しておかなくちゃいけない。

そういう意味で党は放ったらかしで、演説会なり、何かやるにしても、地元の呼びかけがなければ自民党の党員は全然来てくれない。それをどうするかは、大切な問題だと思います。

**大石**　地元の議員さんはいらっしゃらないんですか。

**岡田**　地元の議員が呼んでくれるとか、そんな程度です。党員は、地元の議員とはコネクションがあるけれども、私とはないわけですから。だから党が主体となって何か、という世界ではないんですね。

（次週に続く）

九月二六日、参議院議員会館にて

司会／糟谷廣一郎（編集部）
写真撮影／竹内美保
まとめ／編集部

**民主**
28歳

**大石 里奈**

おおいし　りな・一九七六年岐阜県生まれ。証券会社勤務を経て、〇三年の衆院選に岐阜二区から出馬、落選。今回も同区から立候補、落選。

**今回、小泉さんはうまかった。対して民主党の戦略はまずかった。完全な作戦負けです**（大石）

# 私が政治を変える！

## 総選挙に挑んだ若手候補者たち 下

**若い候補者が非常に多かった先月の衆議院選挙。実際に出馬した5人の方々が、選挙戦の印象、自民大勝の理由などについて話し合った（10月14日号）。さて、次世代の政治をどう変えていくのか――。まずは「野党共闘の可能性」について、考えを聞いた。**

**伊藤渉**
公明党

いとう わたる・一九六九年愛知県生まれ。大学院卒業後、JR東海に一一年勤務し、退職。東海ブロックの比例区から立候補、当選。

**小島潤一郎**
社民党

こじま じゅんいちろう・一九七一年福岡県生まれ。議員秘書などを経て、〇三年の衆院選に山口四区から出馬、落選。今回の選挙では福岡一〇区から出馬、落選。

**岡田裕二**
自民党

おかだ ゆうじ・一九七八年愛知県生まれ。大学卒業後、森元恒雄・参議院議員の政策秘書に。今回の選挙で愛知二区から出馬、落選。

**太田宜興**
共産党

おおた のりおき・一九七六年大阪府生まれ。大学卒業後、印刷会社を経て、共産党の事務所で働く。今回、東京七区から出馬、落選。

**大石里奈**
民主党

おおいし りな・一九七六年岐阜県生まれ。証券会社勤務を経て、〇三年の衆院選に岐阜二区から出馬、落選。今回も同区から立候補、落選。

**――ところで、公明党は、今回の選挙で三議席減りました。自民党と協力して、結果的には損したのでは？。**

**伊藤（公明党）** そんなことないと思いますけどね。三議席減らしたといいましても、比例の得票数は増えていますから、幹事長が言っている通り、大善戦だと思いますよ。

**――今後、とくにいままでのやり方を変える必要はないと。**

**伊藤** 少なくとも私はそう思っています。何か「こうしていかなければいけない」と強く思うものがいまあるかというと、ない。いまのスタンスに、もっと磨きをかけていくべきだと思います。

**小島（社民党）** 私は二年前の選挙で負けたとき、党にファクスを送ったんですよ。党として「どう戦えばいいのか」をこれから議論してほしいと。たとえば比例中心で選挙を戦うのも選択肢の一つだと思った。でも、二年経った今回、突然の解散だったこともあるんだけれども、あまり変わったようには思えない。

自分たちでは答えが出ないというなら、民主党が広告を外部の広告会社に依頼しているやり方を参考にするとか、そういう他党の戦術をきちんと検討・議論すべきだと思うんです。

また、自民党の市会議員の人に、「護憲ばっかり言ってもつまらん」と言われたことがあるんですが、憲法以外にも、「やっぱり社民党が国会の中にないといかんね」と思われる要素を持ってないといけない、とも思っています。

もう一点。今回の選挙、「郵政民営化すべきだ」一点で行くという与党の皆さんの戦術が、まさにツボにはまった。それに対して、社民党の主張には、「郵政民営化是か非か」みたいな、有権者の心に「ストーンと落ちるもの」が、ちょっとなかった。変な話ですけど、私たちの訴えにストーンと反応してくれる人が一〇人に一人いればいいんですよ。でも、それさえ掴めなかったということです。

**――野党共闘の必要性についてはどう考えますか。今回、小選挙区の得票だけをカウントすると、自民党・公明党合わせて三四〇〇万。それ以外の三党プラス無所属を合わせると三四〇〇万。議席が五〇％ずつでもよかったはずです。野党が共闘すれば、それは可能だったわけですよね。**

**大石（民主党）** たしかに政党の票はそうなんですけど、小選挙区の合否が違ったので、議席数にあそこまで差ができたわけです。今回、民主党は前原新体制に変わって、今後どうしていくべきかは議論の余地があるんですが、社民は社民の政策があり、憲法に対する考えの違いもあったりして、「まったく一緒」にはなりませんから。

**太田（共産党）** 日本共産党の場合、選挙協力は難しいと思いますね。憲法を変えると言っている政党が大半ですから。

**――政策協定は結べなくても、たとえば郵政民営化するかどうか、そこに限って、という発想はないですか。**

**太田** 「郵政民営化」で選挙を押し切られたという結果で考えると、これからの国会で、郵政民営化反対の点に戻っての共闘はありうると思います。ただし、今回の選挙での共闘ということになると、私たちが論点にしたかったのは生活の問題で、社会保障であったり、年金、憲法、増税だったんです。そこでは、民主党ともスタンスがぜんぜん違います。社民党とは、護憲という意味では一緒かもしれないけれど、一方で、民主党と選挙協力している地域があったので、やはり私たちの党とは共闘できないということになりました。

**小島** いまのお話、ちょっと違うところもあると思うんですけど、民主党とは今回、選挙協力ではなくて「すみ分け」です。前回、私は社民党公認・民主党推薦なんです。今回はそういうふうに選挙協力というほど踏み込んではいない。やっぱり他党の候補を応援するというのはむずかしい面がありますから。

野党共闘でいちばんのハードルは、やっぱり憲法なんですよ。私は民主党のマニフェストも読みました。憲法の問題、安全保障の問題を除くとそんなに違和感はないです。だから「絶対できない」ということではないと思うんです。民主党に対して、すみ分けを含めてですけれども、どういう野党共闘ができるかもこれから議論すべきではないかなと思います。

共産党のように、政策が違うからもう選挙協力しないと決めているわけではありません。ただ、憲法だけは、候補者調整も含めて絶対に譲れない。

**共産党の場合、他党との選挙協力は難しい。憲法を変えると言っている政党が大半ですから**（太田）

**岡田（自民党）** 前回の選挙で、東大の蒲島郁夫教授が、「共産党に投票した人の七割が民主党に入れていたら、政権交代が起こっていた」と。でも、やっぱり共産党と社民党ではまた違うし、民主党も前原体制になってから、社民党とずいぶん離れちゃったなと思うんですね。まだ自民・民主のほうが共闘しやすいくらいなもので。

**――大連立のほうが実現性ありそうな気がしますね。**

**小島** そうなるんじゃないかというのが、すごくいま心配ですね。憲法のことを考えると。

**岡田** 野党の皆さんはイデオロギーを大事にされて、たとえば「自分は護憲だから手を組めない」というこだわりが強いですね。それは政治にとっていちばん大事なところなんでしょうけれども、どちらかというと自民・公明の、政権を維持する、政権を守るという「現実路線」に負けてしまっている気がします。

**伊藤** 応援していただいている方が、それを望むかどうかですよね。結局、「最終的には国をどうしてくれるんですか」ということを問うて、期待して一票を投じてくれているわけで、いかに少数政党になっても、絶対そのスタンスを崩したくないという方が応援し続けてくれているのであれば、それは崩すべきではないと思います。どこまで行っても、議員は民意を代表する立場ですから、そこに尽きると思うんです。

**岡田** 社民党がもう一回現実主義を探って「自・社」連立をやったら、それこそ社民党はおしまいですよ。

**――ところで、皆さんの親の世代は五〇代、六〇代で、いわゆる団塊の世代。そしてみなさんはジュニア、あるいはその前後ということになると思います。皆さんから、親の世代はどんなふうに見えますか。**

**伊藤** やっぱり、バイタリティがありますよね。人生どうにでも切り拓いていけるぞというパワーは感じますね。

一方で、自分たちがさまざまな苦労をしてわれわれの世代を育ててくれたものですから、われわれの世代に苦労させたくない、と思っている。そのことが、われわれの世代に悪い面として出てしまっている印象を持っています。

だからわれわれの世代はもう一回、今度は自分が矢面に立って道を切り拓いていく力と精神力を培わなければいけないと思います。

**大石** 私はまったく逆のことを思いますね。団塊の世代で学生運動をやっていた方――もちろん一方でノンポリの方もおられたと思いますが、一生懸命やっていた方には、若い人たちに対する期待が非常にあるけれども、自分たちが矢面に立ってどうのこうのという熱意はもうなくなってしまっている。

学生運動の時代にあれだけの弾圧を受けて、若い人が政治から目をそらすような教育なり社会的通念ができてしまって、その結果がいまの「若い人の政治離れ」につ

**政策が違うから選挙協力しないと決めているわけではない。ただ、憲法だけは絶対に譲れない**（小島）

## 団塊世代が子の世代に「苦労させたくない」と思うことが、悪い面として出ているのでは（伊藤）

ながっているのでは、と私は個人的に思っているんです。そういう、若い人が怒って当たり前だった時代にやったことのしわ寄せが、いまきているのかな。すごく極端な見方かもしれないですけどね。

**太田**　私は、伊藤さんと心情的には一緒だなという感じがします。親たちがすごく守ってくれたなと思っています。団塊の世代の人たちを見ていると、ものすごいパワーなんですよ、喋らせても武勇伝が山のように出てきますしね（笑）。

一方で、彼らが苦労を味わって、それをわれわれに味わわせたくないから、いまこういう世の中になったんだという考えは、正しくないですよ。親たちの気持ちだけで社会が動くわけじゃないですから。

いまは戦後すぐの時期より、極貧の若者がたくさんいる。大学を出ても二人に一人は就職できない。二五歳から一五歳までの二人に一人はフリーター。将来の展望が持てない。そういう意味では、痛めに痛めつけられているのがいまの若い世代です。

年金の問題にしても、社会保障の問題にしても、若者の展望を失わせるような社会をつくっておいて、それでいいのかというのがあります。団塊の世代がすべて悪い、とはならない。それ以外にもっと大きな力で、いまの社会がこうなった原因があると思うので、親の世代がこうだったからこうだというふうには切り取りたくないんです。

**岡田**　愛知県の選挙区の地方議員は、ほとんど五〇代、六〇代で、バリバリ現役なわけですよ。小泉さんもそうですけれど、元気ですから（笑）。そのなかでなぜ二〇代の私がやるのか。なぜ、若返りをさせるのか。そこを考えてモノを言わないといけないと思っています。

単に古いものから新しいものへということじゃなく、「二〇代の人間でないと主張できないものは何か」というふうに考えていました。

**小島**　団塊の世代の方々は、これから定年を迎えられて時間的余裕ができるし、学生運動のときのことを思い出して、だんだん政治あるいは憲法の問題に向かっていくこともあると思います。それは私たちも大いに期待をしたい部分ではあります。

ただ、若い人たちにしわ寄せが来て、いま、希望のない世の中になっている。まず若者が希望を持てる社会にしたい。フリーターでもニートでも、そういう時期があっても後にやり直しがきくとか、学歴がなくてもバリバリやれる、そういう世の中にしたい。

また、いまどんどん格差社会になっている。親の収入の格差が、確実に子どもの学歴の格差になっています。そういう面で、四〇代以下ぐらいの人たちにとって将来が不安で仕方がないという、いまの社会をどう変えるか。そのために私は、あるいは社民党は何ができるかということを問い続けていく。次の選挙まで、そこを模索する四年間でありたいと思います。

**伊藤**　党によって基本スタンスの違いはあるにしても、最終的にはみんな幸せになりたいし、平和でありたいわけです。若者が希望を持てる社会、それは当たり前で、「それは違う」なんていう人はいないでしょう。

そういうイメージはどの党にもある。それを現実の形として落とし込むのが議員の仕事だと思っています。目指すべき国の形にそう大差があるとは思えない。皆が笑顔になれればいいのですから。

**小島**　ですよね。でも、不思議なんです。現実の課題でいくと立場が違ってくる。憲法の問題でも、与党と野党に分かれて違ってくる。

**大石**　私はちょっと漠然とした言い方になってしまうんですけど、やはり、日本全体が目標を持つことだと思うんですよ。戦後には復興、バブル時には経済成長という、いままでの日本人には明確な目標があった。でも、バブルがはじけてから、明るく目指すものがなくなってしまった。一方で中流意識は皆さんの中にある。でも現状を見ると国民の二割に貯蓄がなく、貧富の格差が進んでいる。

私はこの五年から一〇年のうちに、日本人がもう一度「考える時」が必ず来ると思っています。さきほどの学生運動の話じゃないですが、振り子の原理で揺れますから、皆さんが政治に回帰する状況も近々必ず来ると思っている。そういったなかで、日本の国として何を次の目標とするかが、大きな争点になると思うんです。

**小島**　たとえば何を目標に？

**大石**　私は「価値観の共有」だと思っていて、「資産があれば幸せ」みたいないままでの価値観が、これからはちょっと違ってくるかなと。どこを幸せの基準にするのか。たとえば時間の使い方であったり、住居の住み方であったり。ただその価値観を満たす道しるべと国の方向性は、政治家がやっていかなけ

## 若い人が怒ってあたり前だった時代にやったことのしわ寄せが、いま来ているのかなと思う（大石）

ればならないことだと思うんです。

**伊藤**　さまざまな問題がありつつも、恵まれた国であることには変わりがない気がするんです。そういう現状にあって、価値観も、一人ひとりが求めるものも多様化しているので、提供する側が、一つの目標というよりも、その人の生活に合わせたものを提供できるようにならなければいけないと思います。

子育て支援一つとっても、経済的な手当てが必要な人もいれば、時間が必要だという人もいるし、ひと通りじゃないんですね。役所なりが、一人ひとりのニーズに合わせたものを提供できる世の中になっていく必要があるんじゃないかなと思っています。

**岡田**　私は、これからの日本は確実に格差社会になっていくと思います。勝ち組と負け組に二分化されてくる社会をどうするか。二分化された社会で安定するならいいんですけれど、いまインターネットもあって、負け組は負け組同士で意思を共有できる社会になった。負け組の人がインターネットや何かでお互い連携し合って、この社会に憤りと不満を感じて革命を起こしたいとか、この社会全体をなんとかぶち壊したいということになると、日本全体の不幸になるので、これをどう解決していくか。

共産主義的な、もしくは社会主義的な解決策だと、たとえば勝ち組をみんな負け組のほうに下ろして、とにかくみんな一緒にしましょうという思想でしょう。でもわれわれ自由主義者はどう考えるかというと、強制的にこっちからこっちに動けというんではなく、いったん負け組に来ちゃった人も、すぐ勝ち組に戻れるようにする。勝ち組に来た人も、負け組に落ちるかもしれないけれど、それは程度の差で、またすぐ勝ち組に戻れると。この程度の差であれば、それほど大きな社会不安、社会の破壊にはならないと思うんですね。

そうするためにはどうしたらいいか。負け組にすぐ勝ち組に戻れるチャンスを与える。税制優遇でもいいし、失業者に対する教育でもいい。もしくは失業者の子どもも失業するという社会連鎖があるのであれば、子どもの教育支援に対してもっと強力に手助けをする。

**負け組に落ちても、またすぐに勝ち組に戻れるなら、それほど大きな社会不安は起きない**（岡田）

それぐらい、二分化を収めるために、われわれ政治家が政治をやっていかなくちゃいけないというのが私の問題意識です。

**小島**　それは政治が競争を促進することになりませんか。

**岡田**　政治がなにもしないと、自ずとみんな競争するんじゃないですか。競争で負けた人は負け組にいくんですけれども、そこで一生負け組だと、彼らは別の解決策を考えるわけですよ。だけど、いまこの五年間は負け組だけど、次の五年間になったら勝ち組に戻るんだということであれば、私はいいと思います。競争すること自体はかまわないと思います。

**太田**　私はまず、憲法をきちんと守ることだと思います。九条の完全実施に向けて努力し、生存権の保障、幸福追求権の保障をきちっとやる。

たとえば年金の問題一つとっても、四万六〇〇〇円という国民年金の平均受給額でしょう。暮らせないんですよ。貯金が三〇万円ぐらいあって、四万六〇〇〇円に二万円付け足して六万六〇〇〇円にして、それで一カ月ごとやり繰りして、あと何年か後には死ぬしかないという人がたくさんいるわけです。

つまり、一人ひとりの勝ち組・負け組という問題に還元するんじゃなくて、生存権の問題だと捉え、それを国家が保障できるかどうかという問題で考えるべきです。

若者に対する支援の仕方にしても、「若者自立挑戦プラン」なんていうのがあって、「若者の自立を促進する」という言い方でしょう。だけど、若者をそういう状況に陥らせたのは、政治なんですよ、政治が、「大企業がリストラすれば、一人九八万円減税してやる」とやったんです。その結果、国民がどういう状況に陥ったか、政治家はちゃんと見ておいてほしい。国民の屍の上に企業だけ成り立つというのは、やっぱりおかしいんじゃないか。そういう意味ではルールをきちんとつくっていくことが重要だと思う。そしてその基本にあるのは、憲法を護るということだと思うんですよね。

**――政治家を志すみなさんのような若い方たちが、これからの日本を左右することになっていきます。それぞれの信念を大事にご活躍ください。**

九月二六日、参議院議員会館にて

司会／糟谷廣一郎（編集部）
写真撮影／竹内美保
まとめ／編集部